



ネガティブ・ケイパビリティと 新型コロナ感染という危機

有田 伸

(東京大学教授)

1 はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの健康や時に生命まで脅かしかねないという点において、また状況のコントロールが難しく、この先がどうなるのか見通しづらいという点において、一種の危機と言える。本稿は「ネガティブ・ケイパビリティ」(negative capability)というやや耳慣れない概念に着目することで、私たちが現在経験している危機の性格、ならびにこの危機に対応していくために必要な資質について考えていくものである。

作家であり、精神科医でもある帯木蓬生によれば、ネガティブ・ケイパビリティとは「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」、あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」(帯木 2017: 3)である。この能力は——あるいはこの能力について知識を得ることは——新型コロナウイルスの感染拡大という危機の性格を理解し、またこの状況を乗り越えていくためにも有用であると考えられる。本稿では、筆者の所属先で行われた全所的プロジェクト研究「危機対応の社会科学」(プロジェクト・リーダー: 玄田有史教授)の成果もふまえながら、この能力がいかなるものであり、さらにこの能力は今回の新型コロナウイルス感染拡大という危機に対応する上でどのように生かし得るのかを考えてみたい。

2 ネガティブ・ケイパビリティとは何か

ネガティブ・ケイパビリティという語は、もともと英国の詩人、ジョン・キーツが弟たちに宛て

た手紙の中ではじめて使った造語である。この手紙の中でキーツは、ネガティブ・ケイパビリティという言葉に「不確か、不思議、未解決の状態を受容する能力」「なんだかわからない不安定で曖昧な状態に居続ける能力」、さらには「不確実な状態に苛立って、安易に事実や理性を追いかけたり、科学的な確実性の中に逃げ込まない能力」(矢倉 2013: 991)を意味するものとして用い、文豪シェークスピアが偉大な創作を成し遂げ得たのは、まさにこのネガティブ・ケイパビリティが高かったためと指摘する(Keats 2014)。創作のプロセスもその代表例であろうが、先の見えない不安定で不確実な状況に身を置き続けるというのは確かにしんどいことである。そのような状況に居続けるくらいならば、何らかの決定や決断を下すことで、早く楽になりたくなってしまふ。しかし、状況の推移を十分に見守らないまま下した決断は、不十分なものである場合も多い。それよりは、不確実な状況に耐えながら持ちこたえ、真に決断すべき段階まで我慢することで、さらなる高みに到達できる、というのがこの概念の骨子である。何らかの決断や決定を行う力がポジティブな能力であるとすれば、それとは対照的に、決断や決定を急がず、目の前の状況に向き合いつつ、不確実な状態に耐える力を「能力」として肯定的に位置づけたところが肝であろう。

このネガティブ・ケイパビリティという概念は、その後、精神分析の領域で注目を集めた(Bion 1970 など)。この能力は精神分析家が症状の判断を性急に行うことなく、先入見なしに患者と向き合い、それを通じて患者に対するより深い理解と共感を得るために必要なものと考えられたのである。このような経緯により、これまでこの概

念は主に芸術、医療・精神療法、さらには教育・保育の領域において注目され、その応用がなされてきた。

他方、その数は必ずしも多くはないものの、海外ではこの概念がHRや組織研究などにも応用されている。たとえばシンプソンらは、組織のリーダーに必要な能力を、ネガティブ・ケイパビリティの概念に基づきながら論じる。組織のリーダーには、何をなすべきかわからないような困難な状況において、安易に防御的な判断を下すことなく、本当に決断を下すべき時まで忍耐強く待つことが必要となる場合もある。しかしリーダーというポジションには、積極的に決断を下すことで周囲を引っ張っていくという「ポジティブ・ケイパビリティ」の発揮が一般的には期待される。そのような期待に抗って、あえて不安の中で時機を待つというネガティブ・ケイパビリティもリーダーには時に求められるのであり、そうすることではじめて、早急な判断をしては不可能だった新しい洞察や気づきが可能となり、結果的により高いレベルの決断が下せるようになる、というのが彼らの議論である(Simpson, French and Harvey 2002)。シンプソンらはネガティブ・ケイパビリティの概念を利用しながら、取り巻く環境の変化に対して組織のリーダーがいかに対応すべきかを論じているとも言えるだろう¹⁾。

3 危機への対応とネガティブ・ケイパビリティ

このネガティブ・ケイパビリティは、危機に対応する際にも必要な能力である。危機というのは、予測したり管理したりすることが可能な「リスク」とは異なり、先の見通しが得づらく、そのためどのように対応すべきか十分にはわからない状態である(玄田 2019)。したがって、危機に対応していくためには、必然的に不完全、不確実な状態に居続けねばならず、そのためにネガティブ・ケイパビリティが必要となる。

危機に少しでも適切に対応するためには、危機の最中において、あるいは危機が訪れる前の段階において「最悪の事態を想定しておくこと」の有効性がしばしば指摘されてきた²⁾。状況を楽観視するのではなく、最悪の可能性まで考えてお

て、できる限りそれに対する準備を前もって行っておく。それによって実際に最悪の事態が生じてしまったとしても、その被害を最低限のものとするることができる、というのがその効用である。

しかし実際には、このように最悪の状態を想定し、それに準備しておくのはなかなか容易なことではない。東日本大震災の際にも、事前に十分に考えておけなかった事象、すなわち「想定外」がいくつも生じ、それによって甚大な被害が発生してしまったことは記憶に新しい。

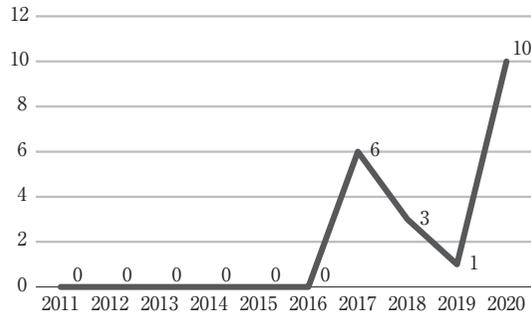
ではなぜ、このように最悪の事態を想定しておくことは難しいのだろうか。その理由の1つが認知の「正常性バイアス」(normalcy bias)だろう(広瀬 2004)。人間には、大きな被害が生じる可能性があっても、「大事には至らないだろう」「自分だけは大丈夫」と考える傾向が存在する。このように、私たちの認知は正常な状態に引きずられやすく、最悪の事態の想定がしばしばおろそかになってしまう、というのが1つの説明である。

そしてもう1つ、ネガティブ・ケイパビリティが十分でないことも、最悪の事態の想定を難しくする大きな要因であろう。最悪の事態を想定しないのは、能力や情報の不足によってそれができないのではない。仮に想定したとしてもその事態にきちんと対処するためのすべが存在せず、問題解決の可能性が見い出せない場合、そのような不安定な状況に耐えられないために、最初からそのような事態は考えないことにしてしまう、というのがそのメカニズムである。これは「意図的無知」(deliberate ignorance)とも呼ばれるものであり、このような傾向も、適切な危機対応を妨げる1つの重要な要因と言えるだろう³⁾(飯田 2019)。

4 新型コロナウイルス感染拡大という危機の性格

このネガティブ・ケイパビリティという力は、新型コロナウイルスの感染が拡大した2020年以降、日本社会でも少しずつ関心を集めている。主要全国紙に掲載された「ネガティブ・ケイパビリティ」を含む記事数⁴⁾の推移を示した図1によれば、前掲の帯木による一般書が刊行された2017年に一定数の記事が掲載されて以降、その

図1 「ネガティブ・ケイパビリティ」を含む新聞記事数の推移



数は減少していたが、2020年には大きく増加している。この増加はやはり新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けたものであり、2020年の記事の内容を見ると、先の見えないコロナ禍に対処する上でのネガティブ・ケイパビリティの重要性を指摘しているものなどが目に付く（読売新聞2020年11月15日付朝刊「『極端』を排し「不確かさ」に耐える」など）。これまで日本社会はさまざまな危機に直面してきたのであるが、新型コロナウイルスの感染拡大という今回の危機は、このネガティブ・ケイパビリティを特に強く必要とするものであるとも捉えられる。

確かに、新型コロナウイルスの感染拡大という危機は、日本社会がこれまで経験してきた危機とは性格が少し異なるのかもしれない。日本社会において人々が何を「危機」と考えるかを自由記述回答の形式で質問した調査の結果によれば、「内容を特定しない」自然災害・天災」を答えた回答者が39.4%ともっとも多く、これに「地震」(27.1%)が続く⁵⁾(有田 2017)。日本に暮らす人々にとってまず想起される危機とは、地震に代表される自然災害であると言える。

このような自然災害という危機は、その根源的な原因が人の手の及びづらい自然界に存するという点で、今回の新型コロナウイルス感染拡大と似通っている。一方危機としてのフェイズの流れには違いも大きい。地震をはじめとする自然災害は、多くの場合、災害が発生した初期の段階において甚大な被害が生じるものの、その段階さえ乗り越えれば、その後状況がさらに悪化してしまうことは少なく、やがて復興が進むにつれて少しずつ元の生活に戻ることが可能となる。このため罹

災した人々が、「この先は少しずつ良くなる」と信じて、厳しい状況を耐えることも不可能ではないだろう。

しかし今回の新型コロナウイルス感染拡大という危機は、2020年冬以降の第3波の到来やそれに伴う非常事態宣言の再発出がその例であるように、一旦取まっていた状況が再び悪化していくこともあり、「この先は少しずつ良くなる」と安易に期待しづらい点が大きき特徴と言える。むしろ「この先の状況はさらに悪くなるかもしれない」という不安を抱かざるを得ない状況に、私たちは長い間置かれ続けている。もちろん個人・世帯のレベルや、組織のレベルではこのようなタイプの危機に直面することもあっただろうが、社会（あるいは世界）のレベルでは、近年あまりなかった経験である。このように見れば、私たちの社会は近年十分には経験していないタイプの危機に直面していることになり、そのために特に対応が不十分なものとなってしまったり、危機的状況に置かれた人々の不安や精神的疲労も一層大きくなっていくものと考えられる。

実際、これまでに行われた社会調査によれば、新型コロナウイルスの感染拡大により、多くの人々が不安を感じている。江夏らの研究者グループがリクルートワークス研究所と共同で、2020年4月に直接雇用の被雇用者を対象として行ったオンライン調査では、対象者が「自分自身の今後」「家族との今後しばらくの関係性」「所属する組織との今後しばらくの関係性」「この社会で生きていくこと」のそれぞれについて不安を感じるか否かを問うているが、その結果に基づけば対象者が「不安を感じる」と答えた比率（カッコ内は

「不安を感じない」と答えた比率)は、「自分自身の今後」で53.6%(17.5%)、「この社会で生きていくこと」で48.2%(21.1%)と特に高い(江夏ほか2020)。

このような「この先の状況がさらに悪くなるかもしれない」という不安は、抑うつ傾向がより強い人々に対して特に深刻な影響を及ぼしてしまう可能性がある(有田2019)。マスコミでも大きく報じられたように、2020年の自殺者数は、11年ぶりに増加に転じており、特に女性において自殺者の増加が目立つ。このような自殺の増加も、コロナ禍における不安の増大や社会経済的な状況の悪化によるものと推測される。

5 おわりに

以上で論じてきたように、危機的な状況に対応するためには、不確実、不安定な状態に居続ける力としてのネガティブ・ケイパビリティが必要となる場合が多い。新型コロナウイルスの感染拡大という危機に関してもこれは同様であるが、今回の危機は「この先の状況がさらに悪くなってしまいかもしれない」と感じられやすい点で特にそうであると言える。またこのような危機の特徴故に、人々の不安や精神的疲労も大きくなってしまふことになる。

先が見通しづらい危機的な状況に対応するための力をネガティブ・ケイパビリティという概念に基づいて捉えることで、私たちが置かれている状況の理解とそれへの対応も少し変わってくるかもしれない。第1に、今日の危機的状況を生き抜いていくために必要な資質とは、ある程度十分に得られている情報に基づいて迅速に決断を下すという平常時に必要な力ではなく、時に最終的な決断を我慢し、不確実な状況に耐えながら、「よくわからないものに対し、わからないなりに」(玄田2019:vi)対応していく力であると考えられる。このように理解すれば、これまで物事をうまくこなせてきた人が今日の危機的状況には十分に対応できない(と感じた)としてもそれは不思議なことではないし、またそのように認めることで現在の状況にこれまでとは異なるやり方で対処していく可能性が開けるかもしれない。第2に、それは

一種の能力である以上、誰もが皆高い水準を持っているとは限らない。ネガティブ・ケイパビリティが比較的高い人もいれば、そうではない人もいて、その相違によって、現在の状況から被ってしまう不利益も大きく異なる可能性がある。このように考えれば、今日の危機的状況のリスクを個々人に帰してしまうのではなく、社会全体で担う仕組みを考えることも必要となるだろう。

個人のネガティブ・ケイパビリティは、その存在を理解し、意識すること自体によっても高まっていくとされる。ささやかながら本稿がその一助となれば幸いである。

- 1) この点に関してさらに述べれば、ネガティブ・ケイパビリティは、ターナー(2020)が論じるリミナリティ、すなわち安定的で秩序のある日常から切り離された過渡的で不安定な状態において特に必要なものと言える。
- 2) 本節の以下の内容は有田(2019)に基づく。
- 3) 飯田(2019)は、知ったところで対処のしようがないことは知りたくない、あるいは知ることにより社会的・法的責任を負うのを回避したいという理由によるこの「意図的無知」は、個人のレベルのみならず、集団や制度による意思決定でも同様に生じ得ると指摘する。
- 4) 検索対象紙(データベース)は、朝日新聞(聞蔵Ⅱビジュアル)、日本経済新聞(日経テレコン21)、毎日新聞(毎索)、読売新聞(ヨミダス歴史館)の4紙。
- 5) 複数回答可。この後は「自分の家計・生活水準の悪化」(14.9%)、「自分の失業・失職」(9.5%)、「自分の病気」(8.5%)と、個人レベルの危機が続く。

参考文献

- 有田伸(2017)「ひとびとの考える「危機」とは何か? —— 社研パネル調査自由記述回答の分析」危機対応の社会科学 ディスカッションペーパーシリーズ No.2. <https://web.iss.u-tokyo.ac.jp/crisis/pub/paper/dp-2.html>
- (2019)「考えたくない事態にどう対応するか? —— 災害への備えとネガティブ・ケイパビリティ」東大社研・玄田有史・飯田高編『危機対応の社会科学 下—— 未来への手控え』東京大学出版会, pp. 349-369.
- 飯田高(2019)「危機対応がなぜ社会科学の問題となるのか」東大社研・玄田有史・飯田高編『危機対応の社会科学 上—— 想定外を超えて』東京大学出版会, pp. 1-26.
- 江夏幾多郎・神吉直人・高尾義明・服部泰宏・麓仁美・矢寺顕行(2020)「新型コロナウイルス感染症の流行への対応が、就労者の心理・行動に与える影響」Works Discussion Paper Series (リクルートワークス研究所) No.31.
- 玄田有史(2019)「はしがき」東大社研・玄田有史・飯田高編『危機対応の社会科学 上—— 想定外を超えて』東京大学出版会, pp. v-xi.
- 齊藤誠(2018)『危機の領域—— 非ゼロリスク社会における責任と納得』勁草書房.
- ターナー(富倉光雄訳)(2020)『儀礼の過程』ちくま学芸文庫.
- 帚木蓬生(2017)『ネガティブ・ケイパビリティ—— 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版.
- 広瀬弘忠(2004)『人はなぜ逃げおくれるのか—— 災害の心理学』

集英社新書。

矢倉英隆 (2013) 「ネガティブ・ケイパビリティ、あるいは不確定さの中に居続ける力」『医学のあゆみ』 Vol.246, No.11, pp. 989-993.

Bion, Wilfred R. (1970) *Attention and Interpretation: A Scientific Approach to Insight in Psycho-analysis and Groups*, London: Tavistock.

Keats, John (John Barnard ed.) (2014) *Selected Letters*, New York: Penguin.

Simpson, Peter, Robert French, and Charles E. Harvey (2002)

“Leadership and Negative Capability,” *Human Relations*, Vol.55, No.10, pp. 1209-1226.

ありた・しん 東京大学社会科学研究所教授。主な著作に『就業機会と報酬格差の社会学——非正規雇用・社会階層の日韓比較』（東京大学出版会、2016年）。比較社会学専攻。